２０２５年０９月１１日 読売東京 朝刊 都民２ １３Ｓ版 ２２頁

「メルヘン」の続き描く

文人の武蔵野

村上春樹 ⑫

村上春樹の短編小説「夏帆」の夏帆は、人間世界の「茶番」――真実を表象する言葉や制度が存在するかの如く振る舞わざるを得ないこの世界――に耐えきれず、合法的に暴力をふるうことで精神の安定を得ようとする特権階級を相手どり、メルヘンで対抗します。

しかし続編の「武蔵境のありくい」では、メルヘン的正義では解決しきれず、人間中心主義的な生死の倫理観とは無縁のところに成立している「食物連鎖」の構造や「ジャングルの論理」の中で生きる動物的存在に巻き込まれることになります。

夏帆が暮らした足立区の花畑。ありくいの導きによって武蔵野市の武蔵境に引っ越す

村上春樹は続編で前者の舞台が足立区の「花畑」であることを明らかにし、後者の舞台に武蔵野市の「武蔵境」（武をおさめる蔵の境と読める）を選びますが、地名の漢字の字面も含めて象徴的です。

特権階級の佐原に狙われた絵本作家の夏帆は、「どこか暗くて、深いところで」自分の顔を失った少女の夢を見ます。夢を写すように、1人の少女が自分の顔を探しに行く話を書き、単色の絵をつけて世に出し、好評を得ます。

小説内童話として作中に示されているのは、顔を失い「間に合わせの顔」を貼り付けて旅に出た少女が、さまざまな経験を積み、貼り付けた顔が最終的に本当の顔になっていた、という話です。本当の顔を見つけてくれたのは、白い毛皮のコートを着た背の高い青年でした。青年は少女に「君みたいな素敵な顔をした女性に会ったのは初めてだよ」と告げます。そして「よくある絵本の結末のように」少女はその青年と結ばれ、幸せに暮らします。

「よくある絵本の結末」は、彼女の傷ついた心を癒やし、「あるがままにこの世界を生きていけばいいのだ」と思うに至るハッピーエンドですが、そこで終わったらそれはメルヘンです。深夜に襲ってくる不安が完全に解消されることはありません。作品内の現実にもその続きがあるのでした。

（敬称略）

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

＊

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。